

東日本大震災と「福祉」に関する論考

Abstract of this huge catastrophe and What we do to protect weak and disabled persons against the disruption

園田真理子 明治大学理工学部 Mariko SONODA School of Science and Technology, Meiji University

Higashi-Nihon earthquake hit the Japan's people who face the population declining and the change of the industries structure. And the nuclear plant accidents added the huge environmental pollution and the change of energy to the situation. Nature is cruel and the huge earthquake and Tsunami sacrificed weaker persons. We must rebuild the normal daily life to protect weak and disabled persons. "Flower and Garbage Tactics" is to watch shelter's residents. We can get the emergency call from residents through the resident's activity of growing flowers and dumping garbage. We must realize the new living style which several persons share the use of a house and the collective town which consist of a Big House-like a community center and small shelter houses.

今回の「震災」考

3月11日午後2時46分に三陸沖を震源にしたマグニチュード9.0の地震が、「震災」として私たちにもたらしたものが何であったか、それをずっと考え続けてきた。今、おぼろげながら、私の中に浮かびあがっているのは、図1に示すようなことである。

自然現象が起こしたことは千年に一度というプレート型の地震と巨大な津波である。それらは青森から千葉にいたる太平洋沿岸部に甚大な環境破壊をもたらした。ところが、その破壊がより巨大なものになったのには、それを受け止める側の人間社会が全く別次元の大きな問題に直面していたからである。その問題とは、一つめには、激しい人口・世帯の縮減であり、二つめには、産業構造の転換である。

震災前、東北地方の高齢化率と合計特殊出生率は、岩手県26.8%・1.39、宮城県22.1%・1.29、福島県24.7%・1.52であったⁱ。つまり、極めて激しい少子高齢化が進み、人口・世帯の縮減にまつたなしの地域を自然災害が襲ったのである。一方、産業構造の転換は、一地域、一国内としての問題ではなく、地球規模で起きている人間社会の変化によるものである。1990年を境にして、世界経済は東西二極に分離された構造から、一つの世界に変質した。加えて、同時に起きたICTの技術革新により、情報と資本がリアルな世界とは関係なく、瞬時に自由に飛び交うように

なり、BRICsに代表される新興国が勃興した。さらに、2000年にEUとしてヨーロッパが一つに市場統合された。ところが、その新経済システムは、2008年9月15日に大きくクラッシュしてしまった。その結果、20世紀後半、世界第2位の経済活動を行ってきた日本社会が、世界の市場の中でどのような位置取りをし、どのような生産活動で経済を保つのか、根源的な問いが突きつけられていた。東北地方の太平洋沿岸部は、長らく日本の農林水産業を支えてきたが、それをより付加価値の高いものにしていくのか、あるいはオンリー・ワンの技術を誇るハイテク産業の生産拠点を築くのか、その方向性を定かにする前に地震が起きてしまった。これが、岩手、宮城の三陸海岸を中心とする地域が直面している事態である。

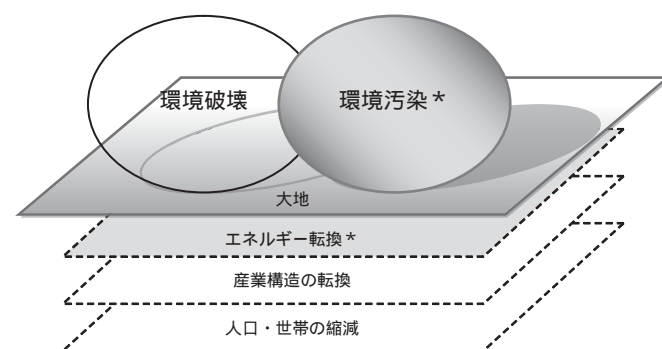


図1 今般の「震災」の構図 *は、原発事故によってもたらされた

ただ、ここまでだったなら、まだ何とかできていたかもしれない。ところが、それに「福島第一」の原発事故が加わってしまった。その結果、環境破壊に加えて、広範な「環境汚染」という別の問題が私たちに突きつけられることになった。その汚染がどの程度なのか、なかなか実感することは難しい。ただ、福島第一原発からちょうど真西70kmの郡山市の農村地域に土地・家屋と水田を有する当事者の立場としてあえていわせてもらえば、我が家の当たりでは、チェルノブイリの事故に関する資料ⁱⁱと素人ながら比較する限りにおいて、汚染地域以上に相当する放射能濃度は検出されている。福島の沿岸部は、環境破壊と環境汚染の両方に曝され、福島のみならず人為的に定めた境界には全く関係なく今なお環境汚染が続いている。

また、この原発事故は人為的な事故である。それゆえに、私たち人間社会のあり方に対して、もう一つの根源的な構造転換を突きつけることになった。それは「エネルギー転換」という問題である。原発を動かせば動かすほど、現時点の人類では対処することのできない「放射性廃棄物」が溜まっていくことを、恥ずかしながら、私自身全く認識していなかったⁱⁱⁱ。しかし、尿尿処理場を持たない水洗トイレを稼働させることがいかに愚かなことであり、技術システムとして完成したものでないことぐらいは直ぐにわかる。

今度の震災が私たちに突きつける問題は、極めて深刻かつ根源的である。人間存在そのものを揺さぶる事態である。人口縮減、産業転換そしてエネルギー転換を背景にして、甚大な「環境破壊」と「環境汚染」に対して、どのような答えを見つけるのか、それが私たち、建築や都市分野に携わる者に問われている。環境破壊に対しては、従来とは全く異なる革新的な土地利用やまち・建築が求められる。広範な環境汚染に対しては、まず、掃除・除染である。取り除いた放射性物質の安全な処理方法も考えなければならない。

「弱者」とはどのような存在か

私が本稿で論じることが求められたのは、そうした震災に対して、福祉的見地からどのような課題があり、何ができるかである。

そこで、まず「福祉」と何かということから考えてみたい。福祉とは、あえて定義してみれば、「運命共同体として損得を超えて助け合うこと」である。では、どの範囲が運命共同体かといえ、福祉は民主的な国民国家の成立と

同時的であるがゆえに、「国家」である。国民国家の傘の下で、運命共同体として構成員によって相互的に行われる助け合いを私たちは「福祉」と呼んでいる。こうした福祉は、何かしらの困難な事象に「いつか自分も直面するかもしれない」という蓋然性によって担保されている。それ故に、税や保険料を原資にした福祉が制度として成立している。生活保護ばかり、医療保険、介護保険、年金保険ばかりである。また、児童福祉、障害者福祉、母子・寡婦福祉、老人福祉のように対象者で区分した福祉もある。しかし、これらは、いわば平時の、しかも機能的に行われる抽象的な「福祉」である。今般の震災のような非常時には、国家の福祉機能と現場との距離はあまりにも乖離している。

非常時には、運命共同体とは各現場のコミュニティになる。それぞれの現場で、助けを求める人に確実に助けを届けることこそが福祉である。その現場にいる人同士が助け合うことが即ち福祉である。

では、助けを求める人、そうした人を私たちはしばしば「弱者」という言葉を使って表すが、どのような人たちのこと云うのだろうか。その存在は、甚大な自然災害が起きた時、4つの段階を経て、明らかになっていく(図2)。

自然災害は残酷かつ正直である。より大きな犠牲を強いられるのは、より弱いものである。自然的な存在、わかりやすくいえば動物として弱いものが犠牲となる。さらに、人間の場合には、それに、経済的な強さ・弱さが加味される。経済力が、各自が確保する環境の安全性を左右するからである。今般の震災では、犠牲者に高齢者が多いことが指摘されるが、これは阪神・淡路の震災でも同じであった。より高齢なものほど「逃げる」という判断能力と身体能

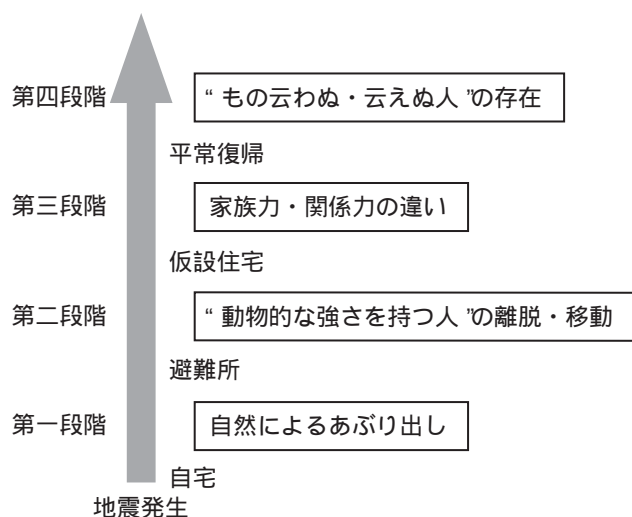


図2 「弱者」とはどういう存在か

力が衰えており、また、助け合える人が近くにいたかどうかの関係力の強さが影響した。さらに、それらの不足を補うはずだった家や建物やその立地等の人為的環境の安全性の質がそれぞれの運命を左右した。

命拾いができたとして、二段階目は、避難所で、誰が弱者であるかが次第に明らかになってくる。弱者かどうかの分かれ目は、自分で自由に居住地や生活の場所を変えることのできる「動物的な強さ」を持っているかどうかである。当座の避難が終わり落ち着きを取り戻すと、動物的な強さを持つ人は、それぞれが我慢できる環境や新しい生活の場を求めて避難所から別の場所に移動していく。時間がたつほどに、自らの力では移動し難い人が取り残されていく。弱者といわれる人は、存在の仕方が植物によく似ている。その土地に小さいながらもどうにか根をはり、その土地からの養分・滋養によって生活を成り立たせている。つまり、地に根付く人である。今回の震災は、巨大津波が建物を破壊するのみならず、もっと根本の土地や地形までを変えてしまった。地震発生から3か月近くを経た今、動物的な人はその地を離脱したり、その地の中で新たな居住地を確保することに取り掛かっているが、それができない人は、まさに根なし草のまま、支援を待っている。

第三段階の舞台は、主に仮設住宅であるが、そこでは各人の関係力によって大きな違いが生じる。ここでいう関係力とは、いわゆるソーシャル・キャピタル、社会関係資本ということもできるが、日本社会の場合には、社会的な関係性以前に、それぞれの人をとりまく家族や親族の力が、「弱者」であるかどうかを大きく左右する。世帯人数が多く、震災で欠けた人が少なければ、その世帯は安定的だといえる。なぜなら、家族内での助け合い、すなわち原初的な福祉が成立するからである。ところが、世帯人数が少なく、特に世帯の中心となる夫婦に欠損がある場合は、震災後極めて厳しい環境に置かれている。高齢な単身世帯、子供のいない高齢な夫婦世帯、父子・母子世帯は親が高齢な場合と、子が児童・生徒以下の場合があり、両者では困窮する状況が異なる。家族の中に障害を持つものがいた場合には、この家族力の違いが一層大きく影響する。

実はこれは、地震の有無に関係なく、日本中が直面している事態である。少子高齢化は、極めて家族力を脆弱にする。それを補うために、平時においては社会保障制度や介護保険制度を構築し、震災に際しては仮設住宅への移転はなるべく集落単位でと云われているのだが、すべてが

間に合っていない。衰微した家族力に代わる支えとして、コミュニティ単位で相互に支えあう力を回復させ、強化する必要がある。

第四段階は、平常に復帰した時である。実は、真の「弱者」とは、もの云わぬ人、もの云えぬ人であることを深く認識する必要がある。ほとんどの場合、私たちはその人の要求、希望を「言葉」を通じて了解する。だから、今、多くの被災地ではアンケートやヒアリングという方法で、被災者の意見や要望を聞くということが行われている。しかし、赤ちゃんや、小さな子供、知的・精神に障害のある人、認知症の人は、言葉によって自らの意思を示すことはないし、できない。多くの場合は親や家族が代弁し、それが要望・要求ということになっている。駅前保育所を親は便利だと思っていなくても、子供がそこをどう思っているかはわからないし、第一、子供は選択できない。福島の子供の放射線量をめぐって、大人たちが大論争をしているが、子供の立場にたてば、どういう選択がベターなのかは、簡単にわかることである。

真の弱者とは、もの云わぬ人たちである。声高な要求ばかりにとらわれず、もの云わぬ人の存在に対して、真摯に向き合うことが「福祉」の第一歩である。

これからできること

「循環」の回復：穏やかな日常とは、意外に単純である。朝起きて歯を磨き顔を洗い、朝食を食べ、働きに出かけ、家に帰り、家族と団らんを楽しみ、そして眠りに就くようなごく普通の日、平日と週末の違いがある普通の一週間がまずあればよい。さらに春夏秋冬と季節が移りゆけば、極めてノーマルである。福祉の分野では、このように一日、一週間、一年が円滑に循環し、生涯が送れるようにすることを「ノーマライゼーション」と云っている。被災した人は、この日常を失ってしまった。そこで、避難所の非日常を日常に変える第一歩として、一日単位、一週間単位の「循環」を回復する必要がある。繰り返しの一日のスケジュールと担うべき役割や責任が、避難所の人に穏やかな日常と生きる意欲を回復させる。メリハリのある朝・昼・晩の時間の流れ、荷物番や食事当番、掃除当番など何かしらの役割を担うことが自己存在の確認になる。都市・建築分野の人間は「たいへんだ！ どうにかしよう！」と騒ぎすぎていないだろうか。特に、高齢者や障害を持つ人は、復旧・復興の前に、一日、一週間の穏やかな「循環」の回復を必要と

している。

「花」と「ゴミ」作戦：穏やかな循環を、必然的に作り出す手立てがある。それは、植物を育てることである。高齢者や障害者に寄せ植えの鉢を一つつくってもらい、その水やりをお願いしますといえ、役割と循環が生まれる。急ピッチで作られている仮設住宅は映像で見ると、無味乾燥であるが、それぞれの窓や玄関先に鉢植えが置かれるだけで、日常の循環と役割が生まれる可能性がある。花が枯れそうになっていたら、「SOS」だと思ってよい。もう一つは「ゴミ」である。人間は生きている限り、日々ゴミが出る。そのゴミを自分で捨てることができれば、「元気だ」という証明である。つまり、ゴミ出しの有無がその人のバイタル・チェックになる。仮設住宅のゴミ集積所に、ゴミ捨て確認ができるもの - 例えば、ゴミ出しの時間を決めておき、その時間までに捨てた人はプレートを裏返すなど - を設け、ゴミ出しをしていない人に、「お手伝いしましょうか」と声を掛けられればよい。この声掛けなら必然がある。声掛けするのは、同じ仮設住宅に住む人同士でなければならない。ゴミ出しを通じて、住民同士の安否確認、見守りと互助が促される。名付けて「花」と「ゴミ」作戦である。

「大屋」と「小屋」：柳田國男は東北に縁の深い人であるが、柳田の明治大正史世相篇^{iv}によれば、日本の住まいには、本来「大屋（おもや）」しかなく、その他は「小屋」であったという。中世、客人があったときには、大屋の近くに別の「小屋」を設け、そこで寝泊りしてもらい、大屋で食をともにし、手厚くもてなした。お産の時には、穢れを避けるため、産土小屋を別に建てた。一族郎党が増えれば、やはり小屋を建て、そこで寝泊りさせたという。「大屋」と「小屋」の違いは、「竈（かまど）」があるか否かである。大屋の他に、たくさんの小屋が敷きつまって建っているところが、すなわち「屋敷」である（図3）。

ところが、近世以降、客人が頻繁に到来するようになると、いちいち小屋を建てるのも面倒になり、その小屋に相当

する部分を大屋にとりこみ、そこが「部屋」になったというのだ。そうであれば、主家の次、三男をなぜ「部屋住み」というのかもよくわかる。家督を譲った老人は、「隠居」とよばれるが、大屋のどこかに「隠居部屋」を設けるか、屋敷の一部に「隠居小屋」を建てて、そこで寝泊りしたのであろう。柳田は、大屋の座敷の張台構えとなっているところの奥は、武者隠しといわれたりしているが、「親隠し」というようなところもあり、年老いた親を扶養する場所としても使っていたのではないかと書いている。

仮設住宅群はまさに現代版の「小屋」である。それとは別に「大屋」がいる。ぜひ、仮設住宅地には「大屋」を設け、昼食や入浴は皆でそこでするぐらいのことを実現したい。あるいは、部屋のたくさんある大屋に、単身者、高齢者、障害者等が集まって居住する方法もある。現代的に言えば、「グループ居住」である。それに適した空家が、あちこちにあるのではないか。

「大屋」と「小屋」を組み合わせた住まい方は、家族力や関係力が衰微した私たちに、未来の新しい住まい方を示唆する。高齢者だから、障害者だから、福祉だから「施設だ」という考えは、原発と同じように古い考え方だ。「大屋」でのグループ居住、「大屋」と「小屋」の組み合わせが、少子高齢化への普遍的な答えの一つになり得る。

i 高齢化率は2009年総務省「人口推計」による。合計特殊出生率は2008年人口動態統計月報年計（概数）による。

ii 河田東海夫「土壌汚染問題とその対応」、第16回原子力委員会資料第2号、p6、7、14

iii http://www.atomin.go.jp/data/movie/movie_contents/telop/013_400k_t.html

iv 柳田國男、明治大正史世相篇、講談社学術文庫、1993.7

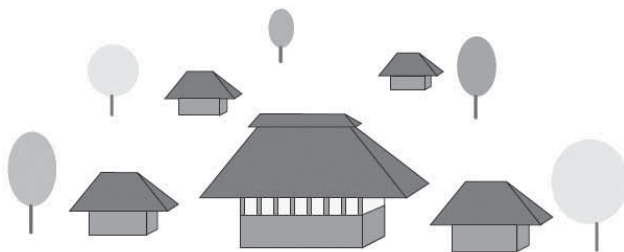


図3 大屋（おもや）と小屋の組み合わせ